

61 日本古医書と漢文

— 大塚文庫資料の文体別・形態別分類

町¹⁾ 泉寿郎・小曾戸 洋¹⁾ 二松学舎大学東アジア学術総合研究所²⁾ 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所

〈はじめに〉平成一六年度より文部科学省の助成を受けて、二松学舎大学において二一世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」が進行中である。本プログラムの調査研究対象は、従来のいわゆる漢詩文にとどまらず、日本人が訓読によって読み書きしてきたあらゆる漢字漢文文献にわたり、近代以前の日本の学術文化の全領域をカバーする。当然ながら医学文献もその中に含む。

〈先行研究〉日本の古医書に関する総目録化については、真柳誠の報告がある(第一〇〇回日本医史学会)。

関連分野として、松田清・ヴォルフガング ミヒェル・吉田忠・八耳俊文・中村士・佐藤賢一らの蘭学書・洋

学書・科技書・天文学書・和算書の研究成果が、先の「江戸のモノづくり」によって集約されつつあり、発表者も医学・本草学資料目録を作成した。しかしながら従来の目録では、文体の違いを反映したものが稀であるため、目録上から漢文著作を検出することは困難であり、実物による調査が不可欠となる。

〈本研究の意義〉文体の違いに配慮することの意義は、単に日本漢文研究上の必要性だけでなく、その相違が著作の性質と密接な関係を有するからである。例えば江戸時代に、一般に通行した文体と表記は、御家流の書体による漢字平かな交じり文であり、漢字片カナ交じり文は平かなよりも学術的な文体であり、漢文体は学術的な内容を表記する場合の最も普通な文体であった。文体(表現形)によって—中国の原書・訓点付の和刻本・諺解・韻文の口訣などを想起されたい—、その著作の享受層の位相化がある程度可能になる。

文体の問題は、日本語の語彙史の上でも看過できない。例えば『解体新書』『気海観瀾』のごとき蘭書漢訳文献の語彙の来原を追及するには、広汎な文献(特に

漢方(医書)の語彙調査による検証が不可欠となるはずである。その語彙調査の前提として、文体の違いを反映した目録が必要となる。

〔調査の方法〕大塚修琴堂文庫(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所寄託)二五六四部を実見して、文体別・資料形態別に次の四項目によって分類した。今回は詳論できないが、資料の形態(刊写、活字・木版、紙質、書型等)も著作の内容と関連する重要な情報であるので、この点にも配慮した。

A—医書、非医書。B—中国漢文、朝鮮漢文、朝鮮諺文、日本漢文、原漢文和訳(カタカナ・ひらかな)、日本和文(カタカナ・ひらかな)、中国原欧文漢訳、日本原欧文漢訳、日本原欧文和訳(カタカナ・ひらかな)。C—中国刊、朝鮮刊、日本刊、中国写、朝鮮写、日本写。D—古活字、近世木活、近代金属活字、木版、石印、油印、銅版、影印。

〔調査の結果〕

中国医書一九三点(中国刊三〇—近代活字三・木版二一・石印五・油印一。朝鮮刊一—木版一。日本刊一

三九—近世木活一・木版一三七・影印一。中国写一。日本写二二。)

朝鮮医書一点(朝鮮刊一—油印一。)

日本漢文医書九四三点(中国刊一—近代活字一。日本刊四四九—近世木活九・近代活字四一・木版三八〇・油印一七・影印二。日本写四九三。)

原漢文和訳医書三九点(日本刊二六—木版二四・油印二。日本写一三。)

和文医書一二〇〇点(日本刊五四四—近世木活三・近代活字四九・木版四六六・油印三七・銅版一・影印八。日本写六五六。)

原欧文中国漢訳医書三点(日本木版三)
原欧文日本漢訳医書三点(日本近代活字一・日本木版一、日本写一。)

原欧文日本和訳医書二三点(日本近代活字一・日本木版一七・日本写五。)

非医書八五点(中国書六、日本漢文二〇、日本和文五八、原欧文日本漢訳一。)